慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダニエル・ベル先生の記念講演への討論
Sub Title	
Author	富永, 健一(Tominaga, Kenichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1995
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.41 (1995.) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	記念講演
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000041-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダニエル・ベル先生の記念講演への討論

富　永　健　一

私がベル先生に最初にお会いしたのは，私がハーバード大学にベル先生をお訪ねした1967年のことでした。その当時，先生はすでに“イデオロギーの終焉”の著者として，世界的に著名でした。私が先生をお訪ねした目的は，『読売新聞』から派遣されて，ベトナム戦争下におけるアメリカの“turmoil”すなわち人種暴動や“young radicals”などの動向，またベトナム戦争に対するアメリカの労働組合の態度や市民の反応などについて，新聞に記事を書くために，ベル先生のご意見をうかがうことでした。

このときはまだ『資本主義の文化的矛盾』は出版されていませんでしたが，ベル先生はのちに同書で展開された経済―政治―文化という3分法 (trichotomy) 図式を用いて，私の問いに答えられました。ベル先生の理論は，パーソンズの理論のように抽象の水準の高い一般理論ではなく，経済と政治と文化の具体的な動向を念頭において，それらを説明するための概念図式でしたから，そのときの私の目的にとってたいへん役に立ちました。

ベル先生にお会いした第二の機会は，1970年にスイスのチューリヒで先生がオーガナイズされた「ポスト工業化社会」会議においてでした。私がこの会議にただ一人の日本人として招聘されたのは，ベル先生が3年前のことを覚えていてくださったためであると思います。この会議は，先生の『ポスト工業化社会の到来』という本が出される3年前のことで，出版前にいろいろの人の反応を聞いておこうという意図に発するものであったと思います。私はこの会議で，先生の「ポスト工業化社会」の概念に異論を唱えたのですが，先生は私の意見をも同書のなかで公正に記録されました。

*

さて今日の私の役割は，ベル先生の講演にコメントをすることです。ベル先生はわれわれに，ヴェーバーによって提起された問題「なぜ資本主義は東洋で発展し得なかったか」に対して，20世紀の最後の1/3における問題は「資本主義はなぜ日本においてこのように成功的に発展し得たか」ということであるといわれました。ベル先生のこれに対する答えは，ヴェーバーよりもデュルケーム，すなわち日本人の「連帯主義」と「グループイズム」にあるということのようです。先生は西洋の普遍主義と日本のパティキュラリズムとを対置され，村上泰亮さんらの「イエ社会」テーゼに言及されました。つまり日本の近代化は日本の伝統主義によって可能であったというのが，ベル先生のテーゼです。

しかし他方，ベル先生は「資本主義の文化的矛盾」テーゼを日本にも適用されました。すなわち，日本の近代化は日本の伝統主義を掘崩すというのです。すなわち，ベル・テーゼはつぎのような二重構造になっているのです。「日本は伝統主義的なパティキュラリズムの精神によって，西洋とは異なるユニークな資本主義をつくりあげたけれども，日本の資本主義の成功と近代化は日本のこの伝統主義的なパティキュラリズムの精神を掘崩す。ちょうど西洋において資本主義の発展がプロテスタンティズムの禁欲倫理を掘崩したように」というのです。しかしそれなら，日本はその結果どこに行くのでしょうか。ベル先生はこの問いに答えていません。

私の近代化理論における考え方は，ベル先生とは異なっています。大分前にマリオン・リーヴィが，近代化を「普遍的社会的溶剤」(universal social solvent) というメタファーによって表現しました。その意味は――私の解釈が間違っていないとすれば――，近代産業文明は西洋人によって創始されたけれども，非西洋世界に伝播されるのにともなって，それが接触した多くの異質な他文明をその中に溶かし込んで，普遍文明になったということです。私もこの考え方に賛成です。たとえば近代の科学技術，資本主義，社会主義，株式会社，核家族，新聞・テレビ，ヨーロッパの音楽や絵画，スポーツなどは，どれもヴェーバーがいったように西洋人によって創始されたものですが，今日では世界中で多くの非西洋人によって担われています。

しかし他方では，近代医学の中に漢方薬を導入したり，株式会社の中に「日本的経営」を導入したり，ヨーロッパの音楽に東洋のメロディーを導入したり，オリンピックの種目の中に柔道を導入したりすることは可能であるばかりでなく，現に行なわれています。同時に，忘れてならないことは，それらの普遍的社会的溶剤によっ

て，非西洋社会の伝統文明もまた変質していくということです。

たとえば，ベル先生が言及された村上さんらの「イエ・テーゼ」は，有賀喜左右衛門の「イエと同族」テーゼのヴァリエーションですが，有賀と村上の決定的な弱点は，イエと同族がまさに消滅しようとしていた時点で，それが不変のものであるような主張を立てたことです。有賀が死んで10年もたたないうちに，フェミニズム運動は家父長制家族を葬っただけでなく，核家族までを壊しつつあります。農村では3世代家族がまだ残っているとはいえ，家長が権力をもっていたら息子に嫁が来てくれませんから，家父長制家族は消滅せざるを得ません。イエも同族ももうとっくに過去のものになり，「日本的経営」さえしだいに解体しつつあります。

*

ベル先生によって本日提出されたテーゼの中で，私にとってとりわけ受け入れがたいのは，「社会は，その中の1つの要素が変化したときに，すべての他の要素がそれによって影響を受けるという意味でのシステムではない」という個所です。ベル先生は，この仮定の下に，広義の社会の領域を「経済」「政治」「文化」の3つに分け，それらは相互に独立であるとされます。ベル先生が『資本主義の文化的矛盾』において，この図式を用いて強調されていることは，文化が経済や政治から独立であるということです。そこでベル先生は，源氏物語や世阿弥の能の例をあげられて，それらが現代でもなお美的・道徳的な影響力を行使しているといわれます。しかし源氏や能は，今日少数の専門家によって研究されているだけで，ロック音楽を鳴らしている現代の若者たちにそれらが美的・道徳的な影響力を行使しているとは，私は思いません。

私の近代化理論では，ベル先生の3分法とはちがって，「経済の近代化」「政治の近代化」「狭義の社会の近代化」「文化の近代化」の4領域を設定し，それらのあいだの相互依存を仮定しています。ベル先生の3分法では，私のいう「狭義の社会」が経済と一緒になってしまっているようですが，私の図式では，家族や村落共同体や企業組織や社会階層や国家と国民社会は，狭義の社会を構成します。近代化と産業化によって，「家と同族」や「ムラ社会」や「日本的経営」が解体していくのは，これらのサブシステムが相互に独立でないからです。もちろん，それらの相互依存にはタイムラグがありますから，戦前の日本においてイエが解体しなかったり，高度経済成長の過程で「日本的経営」が持続したりすることには，すこしも不思議はありません。イエや日本的経営が永続的なものであるかのように錯覚するのは，ものごとを性急に短絡的に判断するからです。もうすこし長期的な視野をとれば，それらがやがて解体していくものであることに気付くはずです。村上氏らのイエ社会論が一時人気を博したのは，短絡的にものごとを判断する人が多いことを示しています。しかしそのような短絡的な判断は，衣服のデザインのファッションと同じように，短い寿命しかもち得ないでしょう。

*

社会科学は「科学」ではあり得ず，「不完全なアート」(imperfect art) にすぎないというベル先生のテーゼには，私もある程度まで賛成です。私自身の用語——それはパーソンズから来ているのですが——でいえば，実証主義と理念主義のどこか中間にあって，たえず両者のあいだを揺れ動いてきました。村上泰亮さんは元来は新古典派の経済学者で，「科学派」だったのですが，『文明としてのイエ社会』によって「アート」派に転向されました。私自身は社会学を「科学」にしたいという夢を若いときにはもっていましたが，それは挫折しました。ベル先生はパレートとパーソンズを一緒にして「科学」派と見なしておられるようですが，パーソンズが主張した「主意主義的行為の理論」は，イギリス功利主義とドイツの歴史主義との収斂をめざしたものですから，パーソンズはパレートほど科学派ではありません。しかしそのパレートも，新古典派の経済学者としては科学派でしたが，“Mind and Society” のパレートはアート派にかなり転向しています。

ベル先生は『資本主義の文化的矛盾』において，ランボオから現代のポップ・アートまでの文化を論じておられ，これはベル先生の独壇場ですから，私はこれらについて先生と争うつもりはありません。社会科学者が自分の学問を科学とアートの両極のあいだのどこに位置づけるかは，その人の個性によることです。しかし，社会科学の命題が正しいかどうかは，実証的ルールの上できめられねばなりません。私はベル先生の「経済と社会と文化は相互独立であってシステムを構成しない」というテーゼは，実証科学のルールによって反証 (falsify) することができる——ただしおそらくは間接的に——のではないかと思っています。社会科学はその程度にまでは「科学」であり得るのではないでしょうか。